

## ごあいさつ

読者のみなさま

このニュースレターは2001年1月号から実に7年にわたり、一月も欠けることなく続けていくことができました。

これも偏に熱心にお読み頂き、応援のメッセージをお寄せいただく皆様の声に支えられてのことと、改めまして深く感謝申し上げます。

また、この間にお寄せいただいた貴重な寄稿文、レギュラーとして書いていただいている仲間の方々のお力添えもあってのことと、感謝申し上げます。

7年間毎月ですから実に84ヶ月にわたり書き続けてきたこととなります。自分の原稿を時々読み返すことがあります、その時々が出来事が同時に思い起され、感慨深いものがあります。

しかし最近、数号にわたって、発行が送れ、今回は11月号と同時という事態に…(^;ゞ諸般の事情によるもので、楽しみにしていただいている皆様には本当に申し訳ございません。

…などを書いてきますと「おや、止めるのかな？」と思われる方もおられるかも知れません。が、ご安心ください。レギュラー陣の中には疲れて休筆する方も居られますが、お読み頂き、楽しみにしていただいている方が居られる限り、なんとか続けて行きたいと思っています。

次号の新年号からは紙面構成・レギュラー陣も新しくなります。どうぞお楽しみに。

引き続き、ご愛読いただければ幸いです。

濱 博一

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2007/12  
株式会社アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

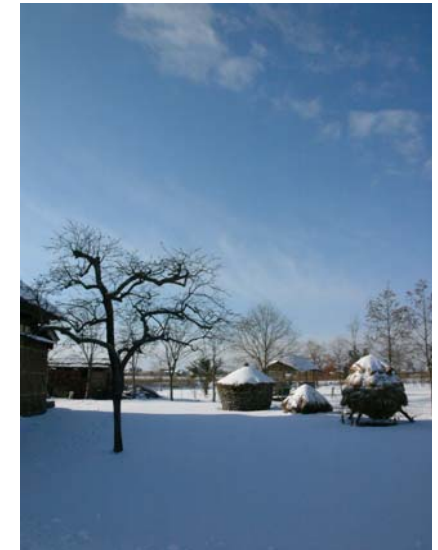
〒920-1167  
金沢市もりの里1-149-302

電話 : 076-233-7217  
Fax : 076-233-7375



2007/12  
株式会社アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 師 走



新潟県豊栄市 by shio

上山市の政策の一つである「協働のまちづくり」の推進の「コア組織」として、平成十三年に市民と職員による上山まちづくり塾が発足した。十七年度まで塾長を東北地域環境研究室代表の志賀秀一氏に依頼し、「ご指導をいただいた。ワークショップやまち歩き、地域づくりの先進地からの講師を招いてのまちづくり講座、先進地への視察と交流を継続、特に由布院や北陸地域、仙台のグループとの交流は、大きな指針や励みとなった。全国的な人とのつながりが大きなサポートとなり、中だけでなく外を見る視野が広がった。

この間の活動で、まちづくり塾が着目的役割を果たすようになり、地域内のネットワークが広がり、様々な動きが生まれてきた。具体的には、イルミネーション連絡会の発足により、ぼらぼらだった商店会が同じテーブルに着き、緑と花のまちづくり連絡会の発足は、市民の手にやる花のまちづくりが徐々に広がり、この中から食用ほおずきとの出会いも生まれた。武家屋敷通りの整備では、通りの整備

のみならず、開かれた武家屋敷、あいさつや自分たちの手で清掃という地域コミュニティも復活、女性団体は訪れたお客様に独自のもてなしを開始。さらに城下町再生志士隊が発足し、武家屋敷に調和した景観を周辺に広げていく活動を展開している。

これらの活動には、まちづくり塾生が学んできた「多くの人達と手を携えながら、自分たちの地域を自分たちの手で住みよいものにしていく」という共通した考え方が基本にあり、それぞれに塾生が陰で関わっている。塾としては、つなぐ役割だけでなく、コーディネート力を付けていくことが課題であるが、「この課題を克服しさらにステップアップしていくことにより、上山まちづくり塾と市民団体の連携で、上山のまちづくりはこれからさらさらに進展していくことだ」といっている。



【プロフィール】  
山口登市（やまぐち とういち）  
新潟大学農学部農芸化学科卒業、  
上山市役所に勤務、平成十三〜十七年度まちづくり推進担当係長として、協働のまちづくりを担当、まちづくり塾の立ち上げ及び育成に関わる。

## 濱のひろさね 「女子」

「気づき」といって、内容の大小・深淺は置いといても、気づきは誰にでも起こる。

やや急いで何かをしているとき、後からこうすれば良かったという手順の良い段取りに気付いたりする。時にやり、「ああそうだったか」と膝を打つ深い納得をさせられる場合もある。

禅宗のある老師が、悟りを開いた道のりを尋ねられ「大悟数回、中悟十数回、小悟に至っては数えられず」と応じたと言っている。

悟りを極めた老師でさえそうであれば、在家で大した修行もせずに小市民然と暮らしている我々は如何。

かつて、気づきのセミナーというものを受けたことがある。2泊3日で在話になり、数々のプログラムを経るなかで、人それぞれに気づきを得てゆくというものであった。私自身、数々の気づきを得たが、その帰途、「気づきはフックイフの皮のようである」と気づいたことがあった。

一つの気づきで極めらるものではなく、その奥、奥の奥、そのまた奥が連なっているのではない。つまり、気づきの無限構造でも言うべき、そのように気づいた。いや、気づかせていただいた。

そして、問題はここからである。

この気づきが何処から来るのか…。考えてみると甚だ不思議ではないか。

内なる声。神の啓示。アカシックレコード（全人類の過去の全記憶が記録されているとされる）へのアクセス。人それぞれにさまざまな捉え方があるようだ。気づきが既に自分の中にあるものならば、自分自身は、無限といっても良いほど、本当は知患者で悟り済みであることになる。しかしこの考えは、人はよく過ちを犯す存在でもあり、矛盾する。

外からもたらされるものならば、神霊・諸仏からのメッセージを受け取れる能力を、人は皆持っていることになる。であれば混迷する今日、なぜ人は「外」にばかり求めているのか。

ノーベル賞候補とも言われているある教授の言。自らの発見はこのアカシックレコードからの伝達であり、自分は何故か、そこからの情報を受け取り、世に伝える役を頂いているだけなのだ。教授は科学者であるためか、さすがに神とは呼ばず、サムシング・グレート（偉大なるもの）と呼んでおられるが…。

教授でなくとも、何か人間を超えた大いなる存在を感じ、信じている人は多い。  
平成十九年も暮れようとしている。この時期、神社仏閣を訪れ参拝する機会が増える。人生の方向性にも深く影響することがある気づき。そしてそれが何処から何故訪れるのか。少しく思いを深くしたいと思っ。

今年は何年であった。来年は平成二十一年子年。数字もきりが良いが、干支も始まりの年にあたる。何かの転機が訪れているのかも知らない。

本年も、皆様には大変お世話になりました。来年もどうぞ宜しくお願いいたします。

秋田県小坂町は、秋田県の北東端、青森県と接する人口約6,600人の町である。かつては小坂鉱山により繁栄し、秋田県内では秋田市に次ぐ人口を有した時期もあった。町には鉱山閉山後も同和鉱業の小坂製錬所が残り、長年蓄積した鉱業技術を活かした金属資源の再生などによる「エコ・タウン構想」が進められている。また、町内の秋田県金属鉱業研修技術センターではJICAの研修員の受け入れているなど、いまま町と鉱業の関係は密接である。

この11月に経済産業省では、国内産業への貢献という観点から「近代化産業遺産」を認定したが、小坂町は秋田県が認定された9件のうち4件を占める。

それらは「有数の金属供給源として東北の鉱業の歩みを物語る遺産群」として、小坂鉱山事務所、康楽館（ともに国重要文化財）、旧小坂鉱山病院記念棟（国登録有形文化財）、それに「近代の日本の国際化に貢献した観光産業草創期の歩みを物語る遺産群」として十和田ホテル（国登録有形文化財）である。町では、これらの産業遺産を観光資源としてすでに15年ほど前より活用してきている。町の中心部には「明治百年通り」とした空間に、日本最古の芝居小屋であり痛みが激しく一時は取り壊しとまで言われた康楽館を修復、小坂鉱山事務所を復元・移築、さらにカトリック保育園であった天使館等を配置した。通りの両脇には町の木でもあるアカシア並木を配し、国土交通省の「美しいまちなみ大賞」などいくつかの賞を受賞している。

明治百年通りでは、町民によるボランティア組織により、花壇の整備や並木にクリスマスローズの飾りつけなどが行われている。このようにじっくり年月をかけて景観を形成してきたのである。この通りの東側には小坂川が流れ、西側は小坂中央公園が整備されており、通りという線だけではなく面としての美しい景観を形成している。

小坂町は日本の発展を支えた産業遺産と明治百年通りの景観、また十和田湖畔の十和田ホテルなど、ぜひ訪れて欲しい町である。



著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

第六十章

治大國。若烹小鮮。以道・天下。其鬼不神。非其鬼不神。其神不傷人。非其神不傷人。聖人亦不傷人。夫兩不相傷。故德交歸焉。

21世紀の始まりとともに開始した明日裡空塾ですが、7年間、84連載も今回が最後となりました。老子シリーズも第60章となり、お世話になりました。

さて、私も四半世紀を越え仕事を続けてきて、最も怖いのは、自分でも気付かぬうちに無事に完納した以前の業務のストーリーで今の業務を進めようとする事です。

たしかに、どんなに違うように感じる業務にも、経験数が増えてくると、多種多様な業務の背景に共通の概念・ストーリーがあることに気付ようになります。

これが知識の知恵化であり、業務をこなす時間の短縮化、高度化につながる重要な能力なのですが、しかし、ここに落とし穴があります。

仕事を始めたばかりの頃であれば、全てが初体験であり、細心の注意をはらわざるを得ない緊張した状況にあるといえます。

これに対し、経験を積み、業務の本数も増えるころになると、部下もつき、単純作業は部下にまかせ、自分は作業方針・スケジュールを考えることが中心となり、現場の空気を感じる機会が減少してくるのを「経験」で補わざるをえず、暗黙のルールを見逃す失敗を犯しやすくなるのです。

経験を積むことで業務遂行マニュアルは描けるかもしれませんが、業務を流すようになってしまっただけでは、マニュアルに表すことのできない「失敗の勘」を失ってしまうこととなります。

以前、300ページを越える行政計画の策定支援をすることになったの



ですが、まさに「支援」であり、他行政の事例を修正していく進め方を採用することになりました。

発注する時期が遅れていたため、とにかく紙ベースの他計画をOCRでデータ化し、誤字脱字があることを許容してもらいながらオリジナル版へと依頼者が手を加えていくよう打合せしていました。

いくつかのブロックに分けて行政サイドへ提出していったのですが、なかなか修正の指示が出てきません。ここで「失敗の勘」が働きました。

依頼者に進み具合をそれとなく聞いてみると、誤字脱字があることは十分に認識していたのですが、内容を吟味しようとしても誤字脱字が気になり、本題になかなか入れず、イライラし始めていたというのでした。

放置しておけば、無理をしてデータ化した作業は全く評価されず、かえって信頼を失い、その後の作業が円滑に進まなくなってしまうでしょう。

仕事上の失敗は、その前に訪れる小さな失敗に気づき、これを早期に修正していくことを繰り返す、言い換えれば、小さな失敗をし続けなければ避けることができないものなかもしれません。

老子も言います。「大國を治めるには、例えば小さな魚を調理するようなもので、一匹一匹に注意を凝らすのではなく、鍋全体の味を見るようなものである。」

仕事にもリズムがあるので、それを敏感に感じる受信機能をも持たなければいけないのでしょう。

by shio